

# けんこう

## ご挨拶

岐阜県総合医療センター  
副院長兼循環器内科部長

野田 俊之



昨今、社会の高齢化が進むとともに救急医療・搬送を必要とする患者数は増えてきています。岐阜県総合医療センターは「地域の医療の最後の砦」の役割を果たすため、「断らない医療」をめざして救急医療に取り組んでいます。

日本の救急システムは、帰宅可能な軽症患者に対する1次救急、一般病棟への入院を必要とする中等症患者に対する2次救急、集中治療室への入院を必要とする重症患者に対する3次救急という「重症度」に応じて救急病院が対応する体制をとっています。当院の救命救急センターは、2〜3次救急の指定ですが、地域の中核病院という役割もあり、1次救急患者も多く受け入れながら、救急車の98%以上を断ることなく受け入れていきます。2016年度の救急外来患者数は

29,353名で、5,851台の救急車を受け入れました。1次から3次まで多くの症例を診るために、救急専門医とともに全診療科の医師が救急外来を担当しています。各診療科は待機医師によるオンコール体制を敷き、各部門の当直体制も充実させ、24時間、専門診療や緊急手術に対応しています。しかし、救急利用が大きく増加することや、急性期を脱した後の退院や転院が滞ることにより、病院の受け入れ能力に限界が生じ、新たな救急患者を受け入れられないといった問題も生じています。

一方、疾患別で見ると救急患者の50%近くは脳卒中や心筋梗塞、心不全といった循環器系疾患が占めています。急性期医療の進歩の伴い、急性心筋梗塞など重篤な心疾患の急性期予後は改善しましたが、これらの疾患や加齢に伴う心機能の低下による心不全が増えていきます。心不全は増悪・寛解を繰り返しながら徐々に弱っていく病気で、その進行を予防するためには適切な食生活や適度な運動が大切であり、当センターでは包括的心臓リハビリテーションを通じて、急性期を過ぎた患者の健康維持にも力を入れています。

こうした高齢化社会に伴う急性期医療の課題に対する取り組みには、家族や地域におけるサポートが重要であり、在宅医療を含めた地域医療機関・施設との更なる連携の強化が必要と考えています。突然、急病が襲ってきた時に、安心して

受診していただける体制を地域の中で築いていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

### 患者さんの権利と責務

患者さんに次の権利と責務があります。

1. 平等に安全で良質な医療を受ける権利
2. 十分な説明と助言のもとに自分自身の医療を決定する権利
3. セカンドオピニオンを受ける権利
4. 個人のプライバシーが守られる権利
5. 医療従事者と協力して医療に参加する責務

### 臨床倫理指針

1. 患者さんの人権、意思を尊重し、有益かつ公平な医療を行います。
2. 治療方針の十分な説明と同意に基づいた医療を行います。
3. 患者さんの個人情報保護し、医療者の守秘義務を遵守します。
4. 治療にかかわる法令を遵守し、ガイドラインに準じた医療を行います。
5. 院内の各種委員会（倫理委員会、治験審査委員会、臓器提供委員会など）の審議結果に基づいた医療を行います。

### 岐阜県総合医療センターの理念

県民の皆様方に信頼され、患者様本位の安全で良質な全人的医療を提供します。

### 岐阜県総合医療センターの基本方針

1. 岐阜県の基幹病院として急性期を中心とした医療を担当します。
2. 科学的根拠に基づく医療の提供と医療安全に努めます。
3. 必要な医療情報を広く公開し、医療の信頼性を確保します。
4. 地域の医療機関や福祉施設との連携を重視します。
5. 迅速かつ確実な医療とともに、効率的な病院運営に努めます。
6. 医学的知識、医療技術の研鑽に努め、医学や医療の進歩に寄与します。



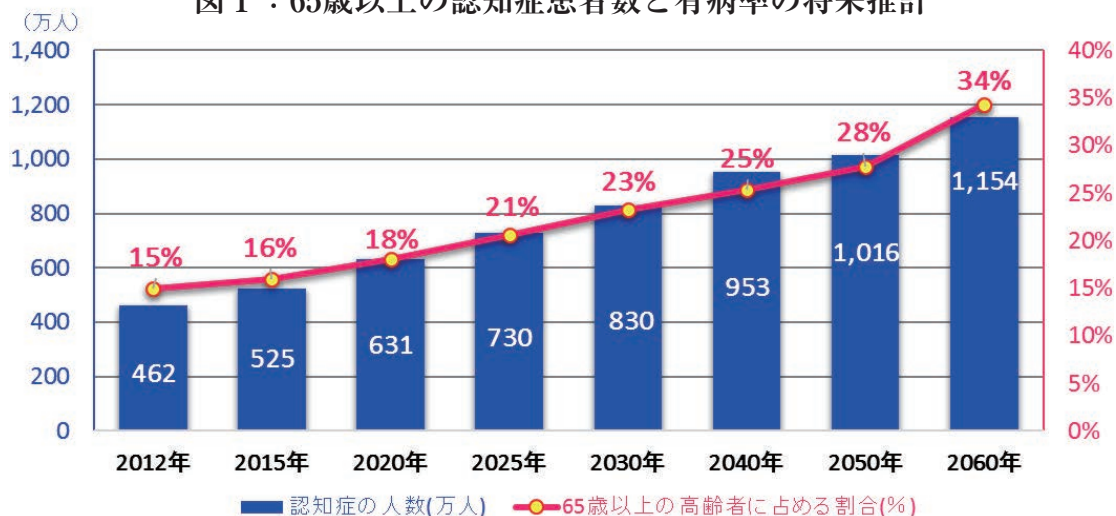
## 認知症について

神経内科部長 西田 浩

神経内科は、脳や脊髄、末梢神経、筋肉の病気を診察する内科で、精神科や心療内科等とは異なります。具体的には、脳梗塞、認知症などの日常よく見る病気からパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、重症筋無力症等比較的まれな病気まで幅広く担当しています。

当科の代表的な病気の認知症は、2012年時点で約462万人の認知症患者さんがいると推定され、今後も増加すると考えられています(図1)。

図1：65歳以上の認知症患者数と有病率の将来推計



※出典：認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～の概要（厚生労働省）を基に作成

認知症のタイプは統計によって差がありますが、アルツハイマー型認知症が最も多く、次いで脳梗塞や脳出血が原因の脳血管性認知症が多いと報告されています。認知症では喫煙、中年期の高血圧・糖尿病・脂質異常・メタボリック症候群予防が認知症の危険因子と考えられています。禁煙やこれらの病気を予防・治療することで認知症の発症を抑制すると考えられていますので、若いころからの健康管理が重要です。また、適度な運動等は認知症の発症を抑制できると報告されていますので、定期的な運動をお勧めします。

認知症かどうか心配される時は、かかりつけ医にご相談し、専門科をご紹介いただくことをお勧めします。



## 手術支援ロボット「ダヴィンチ」

泌尿器科部長 高橋義人

中央社会保険医療協議会は平成30年1月17日の会議で、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を用いたロボット支援下内視鏡手術について、既に保険適用の2件に加え、新たに12件を一挙に保険適用することを承認したという報道がありました。平成30年4月以降、通常の保険診療として行うことができるロボット支援下内視鏡手術が増える予定です。『既に保険適用されている2件』の手術はいずれも泌尿器科が担当している手術で、前立腺がんに対するロボット支援下前立腺全摘除術と小径腎がんに対するロボット支援下腎部分切除です。当科では平成27年6月以降進行膀胱がんに対してロボット支援下膀胱全摘除術も行っていますが、この手術も平成30年4月以降は通常の公的保険として施行できるようになりました。

今回は、手術支援ロボット「ダヴィンチ」のお話です。日本ではロボットというと鉄腕アトムのような自分で手術をしてくれるロボットを思い描きます。でも「ダヴィンチ」はアトムではなくガンダムです。「ダヴィンチ」には必ず術者がいて、術者の指示通りだけの作業をします。精度や操作性が高く、人間では不可能な作業をも可能にしてくれます。その特徴は(1)人間技を超えた動きができる鉗子(物をつかんだり牽引したりするのに使用する器具)(2)肉眼の10倍の解像度をもつ立体視(3)どんなに緊張しても決しておれることのない手振れ補正機能です。手振れがないことは微細な作業において威力を発揮します。当科では「ダヴィンチ」を使っておよそ500人の患者さんの治療を経験してきました。この優れた「ダヴィンチ」を使い、より精度が高く、より安全な手術に向けた努力を重ねてゆきます。



▲「ダヴィンチ」を操作する医師



# お薬手帳を活用しましょう

薬剤センター部長 谷沢 克弥

お薬手帳をご存知ですか？ お薬手帳はご自分の服用した薬を記録しておく手帳です。ある調査によると、お薬手帳を持つ人は増えていますが上手に使用している人は約3割程度だそうです。そこで賢いお薬手帳の使い方をいくつか紹介します。

## ●薬のメモ帳代わりにしましょう

お薬手帳は薬の名前のシールを貼るだけのものではありません。アレルギーなど、薬の服用後に何か症状が起きた場合、それを記録しておくことで今後の参考になります。また、医師や薬剤師に質問したい事をメモしておけば、次の機会に忘れず聞くことができます。

## ●一冊にまとめましょう

複数の医療機関を受診して別々の手帳を持つと、医師・薬剤師による薬の飲み合わせの確認がされにくくなります。できるだけお薬手帳は一冊に記録をまとめておきましょう。

## ●万一の時に備えて持参しましょう

初めて受診する病院、薬局での市販薬購入時にお薬手帳を見せると、安全に薬を決めてもらえます。また、旅行や災害の時も手帳を携帯すると安心です。

以上、上手なお薬手帳の使い方を紹介しました。毎日薬を服用しない人でも手帳に記録を残しておけば、その後医療機関を受診した時に役立ちますので、上手な活用をお勧めします。



# 多職種心不全チームを 結成しました！

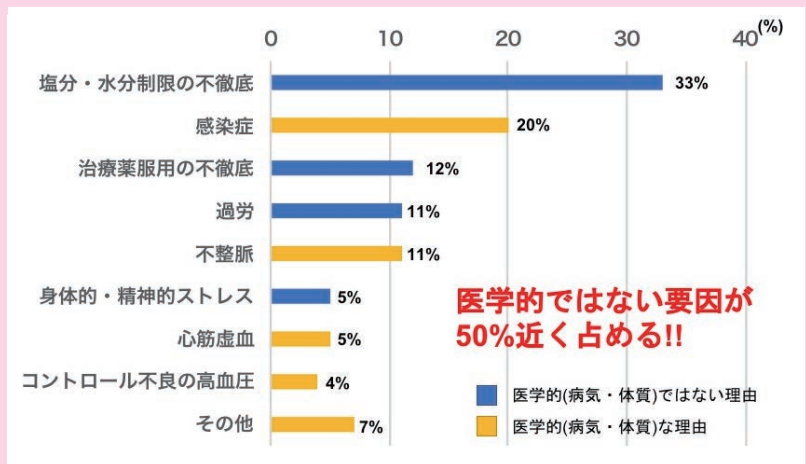
循環器内科医師 矢ヶ崎 裕人

『心不全』とは、『心臓が悪いために、息切れやむくみが起こり、だんだん悪くなり、生命を縮める病気』と定義づけられ、今後国内で患者数が増加する見込みが高いとされています。当院においても心不全患者は増加傾向にあり、平成 28 年度の心不全患者数は約 330 人（緊急入院の約 33%）となっています。

心不全の問題点として、一度入院するほどの心不全を来たした方の場合、退院に至ったとしても、症状が悪化し再入院してしまうということがあります。心不全の再入院の原因としては、疾患の悪化よりは、水分摂取の不徹底や、薬の飲み忘れなど、社会的な要因が半分以上を占めると言われています（図1）。

再入院の防止のために、患者さん、また家人への教育が重要となってきますが、医師、看護師など単一の職種では限界があります。当院では、多数の職種で形成されたチームで心不全患者さんへの治療、教育を行うようになり、2017年5月から本格的に多職種心不全チーム（写真1）として活動を開始しております。具体的には週1回の心不全患者さんに対するカンファレンス、月1回の心不全の勉強会を開催し、よりよい診療ができるように活動しております。

今後ともよろしくお願ひします。



▲図1：心不全で再入院になった患者さん93人から得られた調査結果



▲写真1：多職種心不全チームメンバー

## 看護部からのお知らせ



### より良い看護を実現していくためのチーム医療に力を発揮



集中ケア認定看護師 天野 元浩

命を救う最前線で集中ケア認定看護師として働いています。

集中治療室では、毎日救急搬送された方や手術後特別な管理が必要な方が入室されています。ここでは、患者さんの安心や安楽を最優先にして1日でも早く回復されることを目標にしています。そのためには病状の変化を見逃さず、今後起こりうることの先を読み予防的行動がとれるようスタッフと取り組んでいます。

看護師だけでなく医師や薬剤師、理学療法士など専門スタッフとチームを組み、安全で質の高い医療・看護が提供できるよう積極的に関わっています。また、心配されているご家族の気持ちに寄り添いながら、普段の生活に早く戻れるように共に支援をしていきます。

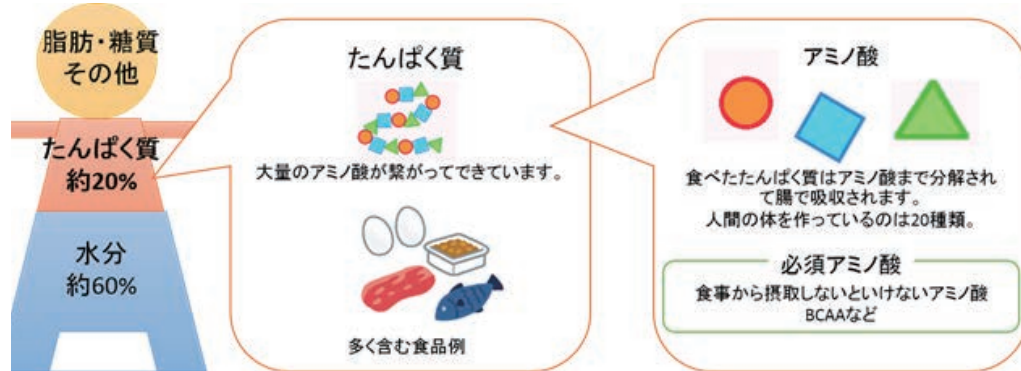
こんにちは

## 栄養管理部です

第33回

昨今メディアで「高齢の方ほど肉をよく食べましょう」ということを見聞きした方も多いためです。

人間の体で一番多いのは水分（約60%）で次に多いのはたんぱく質（約20%）です。たんぱく質で筋肉や内臓はできており免疫力などにも関わっている重要な栄養素です。



肉類はたんぱく質が多く、必須アミノ酸も多いのです。高齢になっても肉類をよく食べることができるのは噛む力、飲み込む力、消化・吸収する力が元気な証拠でもあります。

しかしたんぱく質だけでは筋肉を作ることはできず、肉の脂身をたくさん食べていると動脈硬化に繋がる可能性があるため、栄養素が偏らないようにやはりバランスの良い食生活を心がけることが大事です。魚や卵、大豆製品などからも必須アミノ酸は摂取できますよ。

またどれだけバランスの良い理想的な食事であってもそれだけでは筋肉の維持、増加はできません。筋肉は使わなければすぐに弱くなり使った部分しか強くならないため運動も重要です。

ますます加速する高齢化社会を健康的に生きるために、日々の食事や運動を大切にしましょう。



広報紙「けんこう」第36号をお届けします。  
取り上げてほしい情報などありましたら、お気軽にご意見をお寄せください。

岐阜県総合医療センター 広報委員会  
〒500-8717 岐阜市野一色4丁目6番1号  
TEL.058-246-1111 FAX.058-248-3805  
Eメールアドレス info@gifu-hp.jp  
ホームページアドレス <http://www.gifu-hp.jp>